

# 僕の絵日記

太平洋戦争直後を生き抜いた僕たち

小川 胖

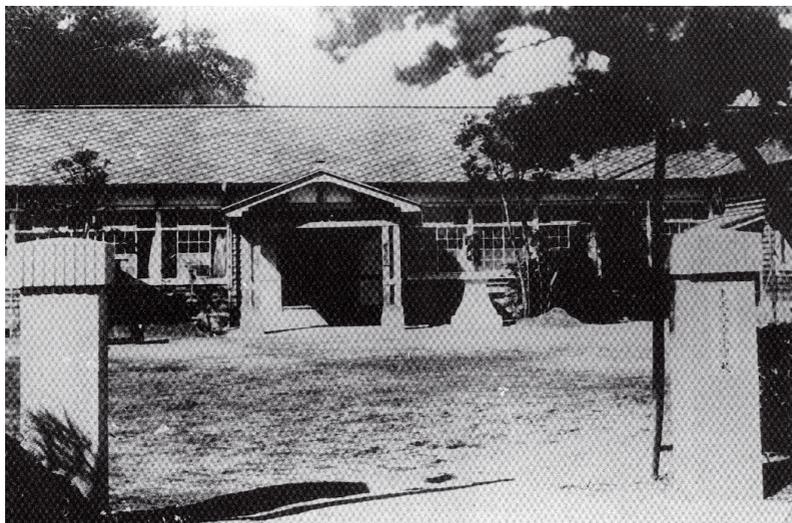
## まえがき

私には母が唯一私に残しておいてくれた昭和二十四年から二十六年（西暦一九四九—一九五二）の小学校五年、六年生頃の十一冊の絵日記がある。

これは第二次世界大戦で敗戦を迎えた年に小学校一年生に入学した私が五年、六年生時に、約一年半書き続けた絵日記で、八十年近くも過ぎた現在はボロボロ状態に近いものである。

しかし何とか文章も読み取れ、幸いなことにクレヨン書きの絵は現在のコピー機でほぼ鮮やかに再生出来たのである。書きはじめたきっかけは五年生の二期に横須賀市立天津小学校から、走水小学校に転籍した時に、担任の先生に提出した日記がきっかけで、五年生徒全員が書くことになったらしいのである。これは終戦を迎えて立ち直りつつあった日本の一漁村の子供のイキザマを描いたものではないかと思ひ、また走水小学校は生徒数激減により、二〇二五年三月末をもって廃校となるため、記念として、鋭意自費出版しようとするものである。

小川 胖



### 走水小学校の由来

走水神社の格上げのため、境内地確保が必要となり、生徒数増加とあいまって、昭和5年伊勢山崎近くに移転した。一町一村の代表的な校舎建築であった。これは昭和13年の写真で、我々が生まれた年であった。



「僕の絵日記」の作り方：ポロポロの右の本物の絵日記から、  
この本の1ページが出来上がります。



三月二十一日（火）

今日はたかさんの家でグローブをかりて、  
豊ちゃんとキャッチボールをして遊んだ。

豊ちゃんはスピードがありました。

はじめのうちは、ゆるく投げていましたが、  
スピードをなげはじめましたので、ぼくはお  
つかなくなってきました。高い球をなげたの  
で、高く手をあげてつきゆびして、しばらく  
投げられませんでした。

そこで豊ちゃんに「ゆるく投げてくれよ」と  
いって、ゆるくキャッチボールをしました。

（豊ちゃんとはぼくの親友なり）



僕の絵日記 太平洋戦争直後を生き抜いた僕たち

目次

まえがき	2
「僕の絵日記」の作り方	4
昭和二十四年	9
昭和二十五年	29
昭和二十六年	151
あとがき	204



昭和二十四年

## 昭和二十四年



### 九月六日（火）転校

今日僕は天津小学校から走水小学校に転校しました。僕ははじめ、みんな意地が悪いだろうなと思いつながらびくびくして学校へ来ました。ところが、みんなしんせつでした。すぐに「おいユタカ野球やんべえ」と言いました。ぼくは「うん」といつてやりました。三時間めにはねんどざいくをやりました。ああちゃんという子が「いつしよにつくろう」といいました。みんなとてもしんせつでした。

（後略）

### 九月七日（水）

今日学校から帰ってきてからトンボをとりましたとるといつても、あみがないので、竹の棒でうちおとしました。うちおとしても、あたまがとれたり、しっぽのほうがちよんぎれてしまいます。たった一匹だけ、うちおしました。いいあんばいに羽にあたったので、じめんでまごまごしている中にとりました。トンボをとる場所を代えているうちに、山小屋の方に行つてしまい、みんなと遊びました。（後略）



九月十日（水）

今日学校からかえつてきてから「かしの実」をとりにいきました。いつてみると、すごいきゆうな山でした。ぼくはこんなところをあがつていくのはいやだなとおもいました。しかしここまできたのであがつていきました。山のてっぺんまでいくと、かがたくさんいるので、足を動かしながら、やしの実をひろいました。あまりないので、ともだちの一人が上へのぼり、ぼくが下で集めておくようにしました。

実を半分ずつに分けて山をおりはじめましたが、ふとふきでつぼうをわすれたのを思い出したので、ともだちに「先に帰っていいよ」といって、そこらじゆうさがしましたが、どこにもありませんでした。そこで、まだかしのみをとっていた二人といっしょにかえりました。



九月十六日（金）

今日はお父さんは横浜に行っていないです。

この日はたかさんという立花住宅の名投手の子が僕の家へ来て、メンバーを紙に書きました。「だけきの方はだれを一番にしようかな?」「おまえはレフトかライトをやってくれ。」とか紙になにやらかいて。「どうもありがとう」と言つて、紙を持ってかえつていきました。僕はつまりませんから、紙にプールを作り、およぐ人を作りきりぬきました、古橋、橋爪、浜口、田中、村山、丸山を「よいいどん」でみんな紙の上におき、手で泳がせました。六人もいるので、一人ずつ、手でうごかすようにしました。

「古橋いま、二〇〇メートルのターンをしました。つづいて橋爪」とほうそうをするまねをしました。」



### 九月十八日（日）

今日は日曜日なので、堀の内と野球のしあいをするのです。朝の七時に集まるようにしました。

ただどあまり野球びよりではありません。

曇っています。しばらくすると七時をうちました。

ぼくはまだごはんを食べてません。しあいを

ところは、馬堀中学校でやるのです。七時になった

ので、みんなしあいに行っていました。ぼくは

あきらめて、行くのをやめました。十時ころにな

ると、雨がぼつり、ぼつりとふつてきました。「あ

あ、行かなくてよかったな」と思っていると、また

はれてきました。ぼくはたいくつなので、ゑをかこ

うかなと思いましたが、やりたくありません。べ

んきようもあまりしたくもありません。なんだか

やな気持ちのする日です。ぼくはタタミの上にご

ろりとねころびました。しばらくするとお昼にな

りました。食事をしたあと、またねころびました。

本をよんだり、新聞を見たりしていました。

みてるまに二時になってしまいました。



九月二十六日(日) (1)

今日は日曜日です、とてもよい天気です。外にでると、うとうととねむたくなるくらいでした。ぼくは「お母さん、大島くんの家へ行っていい？」という、「だめです」といいました。「ちえ、つまらないの」「ねえ、行っていだろう」「いけません」。そこへ紙しばいがきたので、見にいきました。そこへお父さんが来て、「胖、あさをとりにいこう」というので、「うん」といって、あさをほりにいきました。見ると、まだしおはあまりひいていません。だからあさはなかなかありませんでした。だから、ぼくは、岩と岩のところ、あさをほりました。あんが良くとれました。二十分ほってから「ぼくべんとうをもつてこようか？」という、父は「うんもつておいで」とうなずきました。家へいくと、なんといきたかった家のこども達みんな遊びに来てました。ぼくは大島くんがあそびにきたのでとてもうれしかった。お父さんにべんとうをもつていくのをやめました。



九月二十六日（日）（2）

三十分くらいするとお母さんが「大島くん、ゆたかごはんだよ」とよんだので、みんなでごはんをたべに行きました。それからまもなくお父さんがかえってきました。ぼくと大島君とその下の二人の妹と海に行つて遊びました。ぼくはそばにあったボートにのつていたずらしていると、そこへ船の持主がきて、「ぼうや、つりばりがあるからあぶないのよ、おりな」といったのでおりました。それから四時半ごろ、帰るといいました。わかれる時はこくいっこくとせまつてきました。かえる時がきました。

「ぼくもいつしよにおくつていつてあげる」とおくつていきました。しばらくするとバスのていりゆうじよにつきました。それから十分ほどまつていと、バスがきました。大島くんたちはバスにのりました。ぼくはおいながら、手をふつてわかれました。